

CNCP/SLIM Japan 合同シンポジウム開催結果概要

アセットマネジメントを自治体行政に活かすには



CNCP 企画サービス部門長 有岡 正樹

平成 29 年度の CNCP 活動見直しワーキングチームによる検討の結果、この 8 月の新年度より筆者の担当してきたサービス提供部門は、新規一転「企画サービス部門」として調査・研修機能を重要視する方針を立てて活動を展開することになっている。

その一環として、CNCP 会員の NPO 法人社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会(SLIM Japan)がその設立 10 周年の企画として準備を進めている「アセットマネジメントを自治体行政に活かすには」と題してのシンポジウムを支援することになった。東京大学伊藤国際学術センター伊藤謝恩ホールで、その収容カー一杯の 350 名を定員とする一大行事として開催された結果を速報しておきたい。

1. シンポジウムの概要

◎日時：平成 30 年 8 月 21 日（火） 12 時 45 分～18 時 45 分

◎会場：東京大学伊藤国際学術研究センター 伊藤謝恩ホール

◎プログラム

開会挨拶 第 99 代土木学会会長、
現 CNCP 代表理事 山本卓朗氏



1) 先端研究紹介の部 ……………13:00～14:30

講演 1. 「内閣府 SIP インフラメンテナンスの活動について」

横浜国立大学先端科学高等研究院 上席特別教授、
内閣府総合 SIP プログラムディレクター 藤野陽三教授

講演 2. 「最新のアセットマネジメントの取り組み」

京都大学経営管理大学院教授、土木学会会長、
(一社)日本アセットマネジメント協会(JAAM)会長 小林潔司教授

講演 3. 「地域の人材育成における大学の役割」

長岡技術科学大学名誉教授
インフラメンテナンス国民会議北陸フォーラム リーダー
丸山久一教授



2) 討論の部 ……………14:40～17:30

テーマ講演 「アセットマネジメントを行政運営に活かす」

東京大学大学院 工学系研究科 小澤一雅教授

パネルディスカッション

「自治体におけるアセットマネジメントの有効な推進を目指して」



パネリスト

国土交通省総合政策局事業総括調整官	吉田 邦伸氏
桑名市長	伊藤 徳宇氏
(株) オリエンタルコンサルタンツ 代表取締役社長	野崎 秀則氏
(財) 首都高速道路技術センター 上席研究員	高木 千太郎氏

ファシリテーター

東京大学大学院 工学系研究科	小澤 一雅教授
----------------	---------



2. シンポジウムの狙い

一般に、地方自治体にはインフラマネジメントを推進するだけのお金、人、技術が十分ではないと言われているが、「産官学民」のリソース（予算・技術・人材）を総力挙げてどう対応すればいいのか。内閣府が実施する戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）や国土交通省のインフラメンテナンス国民会議の取組が途上にあり、そこではインフラマネジメントに係る革新的技術・先進的材料・データ管理あるいは技術者育成やインフラマネジメントシステムの地域への実装が少しずつ試行され始め、地域型アセットマネジメントの推進が図られようとしている。

したがってこれからは、どのようにアセットマネジメントを自治体の行政運営に活かしていけるかが課題ではないかと考え、一例だが、職員が企業会計的な思考を持つにはどんな意識改革が必要か？ インフラマネジメントのPDCA サイクルをうまく回すには官民がどんな役割分担をするのが良いか？ あるいはアセットマネジメントを推進する上で実効を発揮する体制（例えば、縦割りから横串を刺す組織へ）を敷くにはどんな工夫をすべきか？ 市民との合意形成の方法は？ 等の課題を共有したいと思い、このシンポジウムを企画した。

この方面で長年啓発活動をなさっている先生方、実業でインフラマネジメントに携わっておられる民間企業の方、及び国・自治体行政の最前線でこの方面に取り組んでおられる方々による、産官学の立場から幅広い講演と話題提供、そしてそれらに基づくパネルディスカッションを展開した。紙面の関係でそれらの内容や詳細を記すことができないので、後日参加者等に報告書として情報共有する予定である。（建設通信新聞 2018.8.23 参照）

3. まとめ

350名定員の企画に対し、結果的には340名の参加を得て成功裏に開催することができた。また、そのあとの約1時間150名を超える参加者が集った懇親・意見交換会も右写真の様に盛り上がり、初期の目的を果たした。その客観的な理由としては、以下が上げられよう。



- ・テーマとした問題が建設産業だけに限らず、大きな意味で昨今の世相を反映していること
- ・この分野切ったのご専門の先生方の協力が得られ、その知見を聴くまたとない機会であること
- ・東京大学の一流記念館での、5時間に及ぶ開催時間と350名定員という想定外への期待
- ・多くの協賛、後援組織による人材データベース等を通してのバルクの勧誘活動

こうした偶然の重なりもあったが、後援企業の一つである(株)ISSの社員の方々による、その準備および今日の開催に向けての多大のご尽力が何よりも大きい。この機会に深甚の謝意を表したい